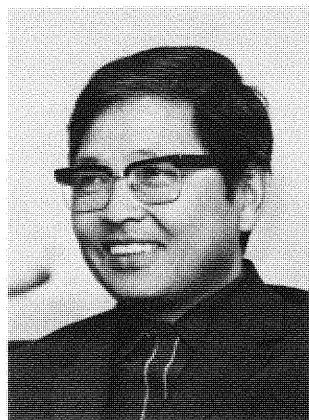


祝辞

三十年一世



陳
秉
臣

センター街は、戦後の神戸の復興と繁栄のシンボルであるといつてよいだろう。いまでもときどきセンター街を歩いていて、ふとそのあたりが瓦礫の原であった空襲直後の情景を思い出すことがある。よくもここまでやったという感慨が深い。同時に三十年という歳月の重さを、身にひしひしと感じる。

二十年ひと昔ということばがあるが、中国では「三十年を一世と称す」という考え方があつた。たとえば何某の五世の子孫という記述があれば、その一世の平均を三十年とみて、何某がその家をはじめから百五十年たったところだと、大雑把にかぞえるのだ。人間には幼年、少年時代があり、勉学期、そして修業期がある。その時期には父親は健在であることが多い。父親の隠居あるいは死去によって家督を継ぎ、それをわが子へ渡すまでの期間を、ほぼ三十年とみたのである。平均寿命が大幅にのびた現在では、このかぞえ方にはいささか問題があるかもしれない。それでも三十年とい

えば、やはり一つの大きな区切りであることにはかわりはない。

「世」という字そのものが、十の字を三つ重ねて三十をあらわしている。二十を廿と書くのは、現在でもよく使われ、三十を卅とするのもよく見うけられる。だが、「世」の字をよくみると、廿にもう一つ十を加えた形だが、この最後の十はカーヴをえがいて、ずっとのびている。ここがこの字の味わい深いところである。

三十年という長い歳月に敬意を表して、一種の詠歎がこめられて、最後の十がのびされたと解してよい。私は「世」という字にたいしては、最後の線が長くひかれ、折れまがることによって、つぎの世代へうけつがれることを暗示している、という私的な解釈をしている。

センター街では大きな改造がおこなわれた。人によっては、これが大きな区切りで、生まれかわったという表現をしているようだ。たしかに町としては、一世から二世へ移りつつある。しかし、私はセンター街創業の精神をここで思い返して、区切りよりも「世」の字のもつ継続のほうに重点をおきたい。みごとにうけつがれることを、心から期待する。

